

第10章－1 産業革命

<イギリスの先進性>

1. 中世農奴解放

ノルマン朝が征服王朝であったため、諸侯が領主裁判権なし
よって、貨幣地代への移行＝農奴解放となった。
地方貴族 → ジェントリ（郷紳）
農奴 → ヨーマン（独立自営農民）

※他国では、農奴解放はフランス革命以後

2. マニュファクチュアの進展

15c末～ 第1次囲い込み（エンクロージャー）

地主が小作人を追い出して牧羊 → 毛織物業の原料供給
追い出された農民は、毛織物マニュファクチュアの賃金労働者に

18c半～ 第2次囲い込み……農業革命（同時進行の産業革命の農業部門）

かぶ・クローバーなどを三圃制の休耕地に植える（四圃制）
これによりさらに農業生産力UP

↓

地主が中小農民の土地を兼併し、賃金労働者を使用した大農場経営。

ますます多くの賃金労働者が発生し、それが工業部門に供給される。

3. フランスとの植民地獲得競争に勝利 → 海外市場確保、資本の蓄積（下述）

4. 石炭・鉄鉱石などの地下資源豊富

5. 科学技術の発展

<インドの植民地化>

東インド会社によるインド＝キャラコ（インド産綿織物）の輸入

↓

イギリス国内の毛織物業との競争

1700 議会、インド産綿織物輸入禁止法制定

⇕

しかし綿織物は毛織物より洗濯が容易、清潔な生活が可能

↓

イギリス国内での綿織物生産→この新産業で技術革新進む

一方、インドは原料供給地に留め置かれる（綿花の現地での加工禁止）

<資本の蓄積と投資>

リヴァプール 商人……産業革命前は、植民地貿易・奴隷貿易で利益をあげる

↓

産業革命で、新興の綿織物業に投資……近郊の マンチェスター が綿織物業中心地に

< 産業革命 (Industrial Revolution) >

経済学者アーノルド・トインビー (1852-83) が命名
同名の甥 (1889-1975) は歴史学者で『歴史の研究』の著者

※機械の発明そのものは「技術革新 (innovation)」でしかない。
それに伴う社会構造の大きな変化 = 「資本主義経済体制の確立」が重要。

▼綿織物業における機械の発明

新興産業のため、ギルドなどの伝統に縛られず革新的

ジョン・ケイ ……1733 飛び杼 (flying shuttle) 発明
織機の横糸を通す梭をバネ仕掛けにすることで幅広の布を織れるように
→手織工の迫害を受けてフランスに逃げ、貧困のうちに死去。

ハーグリーヴズ ……1764 ジェニー (多軸) 紡績機 発明
紡績機を多軸にして、一度に多くの綿糸を生産 (妻の名をつける)
→特許をとらず貧困のうちに死去。

アークライト ……1769 水力 紡績機 発明・特許取得

クロンプトン ……1779 ミュール 紡績機 発明
上記2者の折衷ということで特許をとらず。(mule = らば = 馬とロバの相の子)

カートライト ……1785 力織機 発明・特許取得
牧師だったがちょっとした工夫で自動織機発明し特許取得。

※ホイットニー (米) ……1793 綿繰器 発明。かえって黒人奴隷の使役がきつくなる。

▼新しい動力 = 蒸気機関

1710 ニューコメン、炭坑用排水ポンプ発明



1769 ワット、上記ポンプを改良

1781-2 ワットによる複動式機関の発明
ピストンの往復運動を、回転運動に変換するしくみの発明
=これにより、様々な産業機械への応用が可能に

▼製鉄・炭坑業

1713 頃 ダービー (父) ……石炭製鉄法の発明

1735 ダービー (子) ……コークス製鉄法の発明 → 製鉄における燃料費が1割以下に

▼交通機関

1807 フルトン (米) ……蒸気船 の試運転 (クラーモント号、外輪式)
→ 1839 スクリュープロペラ式の採用

1814 スティーヴンソン、彼自身による17台目の蒸気機関車 製作
→これが、1825年に実用化される (ストックトン・ダーリントン間)
1830年、リヴァプール・マンチェスター間開通 (同年、アメリカでも)

※トレヴィシックが1804年に軌道式鉄道 (レールの上を列車が走るしくみ) を発明

< 他国の産業革命 >

まずベルギー (1830独立) に波及、ついでフランス (小農民多く発達遅い)
19c半、ドイツ・アメリカ……両国は急速に発展し、生産力ではイギリスを追い越す
19c後半、ロシア、日本

< 資本主義経済の成立とそれに伴う諸問題 >

資本家 (ブルジョワジー、生産手段を所有) VS 賃金労働者 (プロレタリアート)
分業による協業 → 人間が社会の歯車と化した状態 (人間疎外)
低賃金・長時間労働 etc. → 労働運動 → 社会主義思想の発生